

漱石の「現代日本の開化」をどう教えるか

吉澤久良先生（高津高校）

吉澤先生には、評論教材の定番である夏目漱石の「現代日本の開化」を素材として用いながら、評論の読解方法を生徒に考えさせながら体得させるという授業スタイルを実演していただきました。

先生の授業パターンは、生徒の作業や活動を中心にすることを主眼し、教師が話すのは授業の3分の1程度の時間を目標にしているとのこと。教師が一方的に話さず、生徒が自ら話し合いに取り組むことより、自力で文章を読み解いていく力をつけることができ、「わかる」感動が大きくなり、退屈して寝ることもないという主張には、賛同する参加者も多かったと思われます。

先生は、資料として「評論読解のポイント」をまとめたプリントを配布してくださいました。その中から、生徒に体得させたい項目として、①繰り返されるキーワードに着目すること、②接続語によって前後の文の重要度を見分けること、③同じレベルでの二項対立を見つけること、の3点を挙げ、模擬授業的に手順を示して下さいました。

生徒への問いかけは「この範囲からキーワードを二つ探せ」や「この範囲での二項対立を挙げよ」などから始まって、文章要約の際には「具体例は論理展開の把握の際には不要であるから無視できる。どこが消せるか？」など、さまざまなアプローチを示唆していただけたと思います。キーワード・接続語・二項対立は、論理的文章の読解の着眼点としてよく言われていることですが、具体的な文章と関わらせながら説明いただくことで、参会者の理解・納得もより得られたのではないかと感じます。また、この3点を押さえることで要約文の作成もぐっと容易になるという事例も示していただきました。

生徒の文章読解は、ともすれば「なんとなく……」に陥りがちな中、理屈を伴った説明を示してやることで、初見文にも自信をもって対応していける力がつくのだという説明にも得心がきました。

今回は評論を素材とした論理的スキルが中心だっただけに、誰もが授業に生かせる教授方法として非常に参考になった一時間でした。

（文責・田中啓介）